「生きて働く読解力の育成を目指す指導法の研究」
－目的をもって、情報を関連付けて読み、考えをまとめる力を育てる授業づくり－

研究協力委員　福島県　佐久間　裕之

1時間にただ1つの目標で指導効果を高める　～ 一つの花 ～

１　はじめに

文学教材の授業づくりにおいて、自分の考え、即ち－教材作品への見方･考え方、およびとらえ方･解釈･意見－をまとめることを明確な方向性として定めるなら、生きた濃い時間が生まれ、深い読みへと迫る自主性・主体性を育てることができる。１単位時間の中においてさえ、本質的な焦点へと目を向けて学び合える学習集団の育成を日々強化していくことが可能なる。

２　話し合って、考えをまとめるだけ

作品「一つの花」には、お父さんが電車に乗って行ってしまう場面が出てくる。タイトルでもある「一つの花」という言葉が重く深い意味を持ちピックアップされて登場する。

「一つの花」を大切にすることの意味は、次の話し合いから次第に明らかになるのではないか。

【Ａ　中心話題】

お父さんは、ゆみ子に「一つの花」しかあげることができなくて、残念だっただろうか？

【Ｂ　学習目標】

このことを話題にしながら、「一つの花」という言葉のもつ様々な意味について話し合い、根拠や理由を含めて自分の考えをまとめる。

それだけやっていればよしとする目標である。考えの立場はどちらを取ってもかまわない。

これらの答えは、もちろん本文中に書き込まれていないのだから、気持ちなどは分からない、とすべき立場があるのは分かる。だから、作品の空所（イーザー）を埋めるべく話し合うのである。

話題としてこれらを取り上げる理由は、「一つ」「花」、そしてそれらが組み合わされた言葉「一つの花」のもつ多面的な意味の側面を、子ども達の発言により浮き彫りにするためである。教材は、この場合、考えを作るための資料としての役割になる。父の気持ちを想像して共感することは、全く最終目的ではない。話し合って、各自が自分の考えの立場を取り、まとめることがねらいである。

この【話題　Ａ】を二つに分割すると、次のようになる。

Ａ１　お父さんは、できることならもっと「たくさん」花をあげたかったのだろうか。

Ａ２　お父さんは、できることなら「おにぎり」をあげたかったのだろうか。

正確に言えば、そう考えるべき叙述・表現であると判断する方が、より確からしく整合的か…。父は、残念ながら願いがかなわないので、やむなく「花」を「一つ」持ってきたのか。子ども達のノートには、「おにぎりは、食べたらなくなる」「花には美しさがある」「おにぎりが欲しいと言って泣いているのに」「汽車に乗るちょっと前で困っている」「花は後々まで続く。最後の場面で、コスモスはふえている」「花をもらったゆみ子は喜んでいる」「花とは、心のことを言っている」「もう、もっともっととは欲しがらなくなった」等々。

父にとって、花は「一つ」でよかったのか。言葉「一つ」をまな板にのせ、検討するために「たくさん」を比較対象として出す。世の中には、一つしかないからこそ尊い価値もあれば、多くある方が幸福という事物もある。作者は「一つ」という＜言葉＞を選択の上、＜使用している＞わけである。

本当に話し合わせたいとなれば、時間は案外多くを必要とする。それだけやっていればよしと割り切れた方が、授業は安易にぶれずに済む。この時間の学習・話し合いの眼目は、このことについてあれこれ言い合って、自分の考えを独自の形でまとめるだけである。

ただし、どの言葉でそう考えたのかに触れるのは最低限のルールである。指摘したその根拠から「どうしてそういう結論に至るのか」、いわば理由はきわめて重要である。「理由がどう無理なく、相手意識を持って述べられているか」は、実にその学習集団の実力・実態を表すのではないか。

話し合いというリアルタイムの臨場感ある展開の中で、発言した子の力は相互評価できる。教師からも子どもからも、何となくわかる。その子がどう成長してきたかを見ているからである。

話し合いの途中で、教師は次のように言えばよい。「バラの花束ならもっと素敵だったのにね。」「やっぱり、少ないよりは多い方がいいね、ふつうは。」「一輪しかさいていないんじゃ、時間のないお父さんは、あきらめるしかないか…」などと言って、周辺をぐるぐる回っていればいい。目標自体が、その話し合いにあるのだから、「お金ならどう？」「命は３つぐらいあれば安心なのかな」などと話題の周辺をぐるぐる回っていれば、おのずと中心にあるものに目がいく。

「一つだけ」しかないからこそ、作品「一つの花」は読み手に何かを感じさせる。「他は失ってもこれだけは失えない何か」は、多くの物語やドラマの終末近くに、印象的なシーンとなって訪れる。＜中心人物にとっての答え＞、あるいは＜読者をはっとさせる答え＞がそこで見つかる。

「離れて、強くつく」と言ったのは志賀直哉だが、中心人物と、感情移入しつつ読む読者は、心の旅に出て、大切な何かを手にし、もとの場所へと戻ってくる。切なく生きる人間が、ぎりぎりの場面で何かをつかみ取ったりする。「一つの花」を握りしめるように。

ところで、コスモスの花は、プラットホームのはしっぽで、何輪咲いていたのだろう。誰しも常識的に一輪と考えるが、よく何輪か花をつけるコスモスの特性から言って、あと一輪ぐらいついても物理的に不思議ではない。「一輪だけ咲いていた」とは書かれていない。父の目がそれをとらえたのである。…とすると妙なことに、一輪だけつみ取った父の行動は、意図的なものだったとする立場まで成立しそうになる。

はしっぽにさいていたのは、「わすれられたよう」な花である。お父さんの手にあったのは、「一輪の」花である。お父さんが渡したのは、「一つだけの」お花である。お父さんが去りながら見つめていたのは「一つの」花である。

言葉を根拠としてていねいに扱い、話題にのせて話し合うことが重要なら、様々なこうした言葉の＜差違＞を問題としなくてよいものだろうか。多くの時間がなくては、広範囲に、つぶさに扱い話し合うことはできないだろう。

言葉をていねいに発見し、筋の通った述べ方でやりとりする限り、何でもありの話し合いである。これは、活動あって学習なし、とは決定的に違う。目標とする眼目は一つであり、かかわった諸能力は、他の物語においても、優れた話し合いを可能にする武器になる。こうした話し合いを楽しく何度も重ね育つ力は、見えないようだが、厳然と存在している。もし、複数学級の子ども達が体育館などで一同に集い、作品について自由討論会を行うとしよう。時間がたつほどに意味の濃いことを述べるのは、きっと先のような話し合いを何度も経験した子ども達である。逆に、四十五分間、聞き続けることができない子、ついていけない子の要因は、おそらく、この経験不足から来ている。

こうした場でも、興味深い内容を上手に述べ、議論に方向性も与える柔軟な思考の持ち主は、時間がたつほど際立つことだろう。